

『源氏物語』の「いとほし」

陣野英則

一 はじめに

『源氏物語』における情意性形容詞（または感情形容詞）の「いとほし」、ならびにその派生語の用例数は、合計三八六例⁽¹⁾にものぼる。「いとほし」に限っても、三三九例である。東辻「一九七一」によると、『源氏物語』において「感情語彙」とみなされる形容詞の中では、「をかし」「あやし」「めやすし」「うし」に次ぐ第五位の用例数であり、「かなし」「はかなし」「心苦し」などよりも頻繁に用いられている。また、すべての形容詞の中でも第十位となる。それほど『源氏物語』の中で多く用いられる語でありながら、その語義は甚だとらえにくく、諸注釈を見くらべてみても、解釈にゆれのある場合が少なくない。

次節で詳述するが、主要な辞書に記された語義の説明を集約すると以下のようであろう。

A 自分にとっての困惑・つらい気もちなどをあらわす。困る、いやだ、など。
B 他者に対する同情などをあらわす。気の毒だ、いたわしい、など。

C 相対的にみて弱い対象に向けての保護的な感情をあらわす。いじらしい、かわいそう。さらには、かわいい、など。

さらに、『源氏物語』中の「いとほし」の解釈について、諸注釈・諸論考のとらえ方を瞥見すると、次の三つの立場に分けられるようにおもわれる（独自の説を示す山崎「一九七〇」を除く）。

イ 右のA・B・Cすべての語義をみとめる。

ロ 右のA・Bの語義をみとめ、Cをみとめない。

ハ 右のBだけを語義としてみとめる。

現代の諸注釈は、イまたはロの立場をとるが、北山「一九五六a」、後藤「一九六〇」、木之下「一九六八」、中川「一九八〇a」、池田「二〇〇〇」などの諸論考は、ハの立場をとる（ただし、池田

「二〇〇〇」は少数の例外をみとめている。なお、イまたは口の諸注釈、諸論考でも、大半の用例については語義B、他者への同情をあらわすものと解されている。

「いとほし」が自己の困惑・つらさなどをあらわす場合もあるということを初めて明確に指摘したのは吉澤「一九五〇」である。つまり、六十年以上前までは、Aの語義そのものが充分に認識されていなかったのであり、今日においても、Aの語義そのものをみとめない研究者が複数いる。しかし、「いとほし」の語源に照らせば——語源説は残念ながら一つには絞りきれないものの——語義Aこそが本来的だと考えられる。そうすると、AからBへの語義の変化がいつごろ起きたのかということが検討されるべき重要な点であるはずだが、従来はそこがほとんど考慮されず、たとえば『竹取物語』のように成立の早い作品中の用例も、多くの注釈と論考においてBの語義に解されてきた。

「いとほし」の個々の用例をみてゆくと、『源氏物語』でも、またそれ以前に成立している諸作品の場合でも、語義AかBで、判断の分かれているケースが少なくない。これまで、濱橋「二〇〇二」、濱橋「二〇〇四」が、語義Aに相当する箇所が意外に多くあることを主張しているが、これらにおいても、語義Bの「いとほし」が多く見いだされることを前提としている。そのような見方をとる限り、語義A・Bの（立場によつては語義Cもふくめて）いずれが妥当かを個々に判断しなくてはならない。ところが、その判断がきわめて

難しい。AでもBでも意が通る場合が多いのである。そこで、見方を変えて、『源氏物語』成立時より少しあと、平安後期あたりまでの用例は、一つの例外もなく語義A、自己の困惑・つらさなどをあらわす語として解釈することはできないのだろうか——これが本稿で論証したいことである。

本稿では、「いとほし」の語義をとらえなおすにあたり、まず二節で主な辞書と論考の中から標準的といえる語義の説明、及び語源説を確認することとしたい。つづく三節では、本来的な語義から他者への同情などをあらわすように変化することなく、少なくとも『源氏物語』が書かれた時代まで、自己の困惑・つらさなどをあらわしつづけていた可能性が高いことを多角的に検討してゆく。さらに四節では、C、つまり他者への保護的な感情をあらわすと解されてきた例を『源氏物語』の中からとりあげ、そうした語義を有することもまだなかったのだろうということを論じる。既に陣野「二〇一〇」では、「総角」巻の全二十五例の「いとほし」について検討し、いずれも困惑・つらさをあらわすものと解しうることを確認した。本稿では、多数の用例をとりあげて帰納的に論じるための紙数を確保できないため、そうした検討・解釈は別の機会に行うこととする。すなわち、ごく限られた用例しかとりあげられないが、その代わりに「いとほし」のとらえ方に関する問題を明確にしてゆきたい。

二 「いとほし」に関する従来の標準的な理解

まず、主要な辞典が示す「いとほし」の語義、及び語源説などを参照することで、これまでの標準的な理解を確認したい。なお、掲出された用例は、「……」で略すこととした。

▽『角川古語大辞典 第一巻』（角川書店、一九八二年）

「いとふ（厭）」と同根で、対象から目をそむけたくなる気持をいうのが原義か。「いたはし」の転とする説もある。①自分の存在のしかたが原因で何者かを傷つけるおそれがあるときに、自分の心が痛むことのある場合、その心のさまをいう。対象に対する同情心そのものではなくて、そのようなものに対する自分の気持をいう。つらい。しのびない。なさけない。……②対象に同情して心が痛む場合、その対象についての気持をいう。ほぼ「気の毒だ」にあたるが、今日いうところよりも、いっそう痛切である。同情に堪えぬ。……③②より転じ、相手を愛し大事にする気持のさま。心が痛むほどかわいらしく思う気持のさま。いじらしい。

▽『古語大辞典』（小学館、一九八三年）

- ① つらい。心苦しい。……② ④ かわいそうだ。気の毒だ。……
⑤ いじらしい。かわいらしい。……

【語誌】動詞「いとふ」の形容詞化したものと考える説もあるが、

「いとふ」はいやがる、きらうの意が中心であるから、「いとほし」と直ちには結びつけがたい。むしろ、「いたはし」の母音交替形とみるのが穏当であろう。「いたはし」は動詞「いたはる」の形容詞形で、「いたはる」は心が苦しむ、心を痛めるを原義とする。「いとほし」も心を痛めているの意から、自己に向かつてはつらい、心苦しいの意、他者に向かつてはかわいそうだ、気の毒だの意となる。このかわいそうだの意が、さらにかわいいの意に転ずるが、両者は保護感情をそえられる状態という点で共通する。漢字では、多く「糸惜し」を当てる。

【山口佳紀】

▽『日本国語大辞典 第二版 第一巻』（小学館、二〇〇〇年）

（動詞「いとふ」から派生した形容詞）苦痛や苦悩で心身を悩ますさまを表わす。①自分にとって面白くないと思う心情を表わす。つらい。困る。いやだ。……②他人に対する同情の心を表わす。かわいそうだ。ふびんだ。気の毒だ。……③弱小なものへの保護的な愛情を表わす。かわいらしい。いじらしい。いとしい。……

【語誌】①「いたはし」の母音交替形と考えられているが、平安時代になって多用され、「いたはし」とも併用されている。その「いたはし」は、「いたはり・いたはる」が富を背景とした物質的な待遇を表わすのに応じて対象を価値あるものとして認め、大切にしようとするのに対して、「いとほし」は、あくま

でも精神的な思いやりとして表現されるが、和歌には用いられない。(2)中世から近世初期ころに、…〔以下略〕…

辞典によって語義の区分は少し異なるが、いずれも前節で整理したAとCの三つの語義に分けて説明しているといえる。ちなみに、『岩波古語辞典』（岩波書店、一九七四年）では五つの語義に分けているが、そのうち三つめ以降はCに相当すると見なせる。

さらに、語源説、及び（ここでは省略したが）掲出された用例をふまえて要約してみる。

(一) 語源については動詞「いとふ」と同根とみる説と、形容詞「いたはし」の母音交替形とみる説とがある。いずれとも確定したい。

(二) 二通りの語源説のいずれであっても、先のA、すなわち自己の心情としての困惑・つらさをあらわすのが原義と解される。

(三) 掲出された用例をみると、『竹取物語』のように成立の早い作品内の「いとほし」を『古語大辞典』（小学館）と『日本国語大辞典 第二版』は語義Bの例に掲げ、『角川古語大辞典』は語義Cの例として掲げている。

特に(三)のとおり、「いとほし」の原義は非常に早い段階から別の語義へと転じたものと理解されてきたようだが、その語義の変化の過程については、宮地「一九七九」（初出は宮地「一九七二」）が中世・近世にいたるまでとらえている。ここでは、中世初期までの説明に限り引用しておく（以下の引用中の波線は引用者による）。

・もとは自分のつらい気持にいうが、次第に相手がかわいそうだ、気の毒だという気持にかたむいたと推測される。中世にはいると、しばらくは平安仮名文における意味・用法を踏襲しつつも、次第に愛憐さらに愛情をもあらわすようになった。

……「（自他のおかれた状況に対して、自分が）困る、つらいと思う」意から、「そのような状態におかれた他者を）かわいそう、気の毒だと思う」意に移行したものであると考えられる。（平安期のココログルシ・カハユシ、近世のキノドクも、それぞれ「くるしい」「たまらない」「心の毒——苦痛——だ」という自分の感情から、他者への同情・憐憫に向かった点では、イトホシと共通する）。

語義の変化の過程については、右のような理解でよいのだろうとおもわれるが、波線部「次第に相手がかわいそうだ、気の毒だ」という気持にかたむいた」のがいつなのか、ということがはっきりしない。次節では、そこにポイントを絞り、多角的に検討しよう。

三 同情などをあらわすとされてきた

「いとほし」の問題

ここでは、「いとほし」の語義が平安初期あたりから二つ、ないしは三つに分かれていると考えるのが合理性に欠けることを明らかにしてゆく。以下、具体的には、(1)語源と語義の関係、(2)「いと

ほし」のあらわす感情の対象となるもの、(3)複数の語義があることとの非合理性、(4)用例ごとに語義の微妙な差異をみることの非合理性、(5)類義語とされてきた「心苦し」との関係、という五つの観点から検討する。

(1) 語源と語義の関係

「いとほし」が動詞「いとふ」から派生したもののか、それとも形容詞「いたはし」からの母音交替形とみるべきか、ここで確定的なことを論じるための用意は充分でないが、いずれにしても、「いとほし」が、自身のつらさ、困惑などをあらわしたことは動かないだろう。まずは確認可能な最古の用例から検討する。

品詞は動詞だが、『角川古語大辞典』及び『古語大辞典』（小学館）はともに、「いとほし」の用例として、次の『続日本紀』の宣命第二十七詔（天平宝字六年）を挙げている。

①此朕劣^ル依^レ之^ヲ、加久言^ハ良^ニ念召^ス波、愧^ハ自伊等保^ル母^ノ念須^ハ。

（此は朕が劣^ワきに依^リりてし、かく言^ハふらしと念^ハし召^メせば、愧^ハむ）
しみいとほしみなも念^ハす。）

この語に関する早い言及としては、本居宣長『続紀歴朝詔詞解』がある。それは第二詔にみえる「労^支」の注解で、右の①（第二十七詔）の傍線部をふまえ、「伊登保志伎^{イトホンキ}」と訓むべきことを指摘したあと、以下のように説いている。

此言は、いたつくいたはるなどと同言にて、本はみづから其事に労^{クルシ}苦^シむをいふを、又他^{ホカ}より然思ふにも通はしいへり、労^{クルシ}字

も然也、…〔中略〕…又物語書などに、いとほしといへるは、人の労^{クルシ}苦^シむを、あはれむよりいひて、俗言に、案^{アソ}じるといひ、氣^{キノ}之^ノ毒^{ドク}などいふ意に多く用ひたり、……

「労」の訓の是非は措く。ここで宣長は、「いとほし」の語源が「いたつく」「いたはる」などと同じという説（つまり「いたはし」説に連なる）を示し、元々は自身の「労苦」を意味したという旨を示している。さらに前節でとりあげた現代の辞書と同様、他者を「あはれむ」立場から「氣之毒な」という意でも用いられていることを述べている。

さて、先の①は、淳仁天皇が孝謙上皇に対して批判的な言動をとっていることを受ける箇所であり、『新日本古典文学大系 続日本紀三』の脚注では、傍線部を「はずかしくつらいことだ」と解している。『角川古語大辞典』及び『古語大辞典』（小学館）も、本稿にいう語義Aの用例としてこれを挙げ、大野「一九六一」も同様の解釈を示す。一方で『日本国語大辞典 第二版』は、「いとほしむ」の項で、「ふびんに思う。かわいそうに思う。気の毒に思う。」という語義の例として本文①を挙げ、木之下「一九六八」などもそのように解しているが、その場合は（孝謙上皇が）自身のことを気の毒におもう、といった理解なのであろうか。この傍線部で、他者に対する同情などをあらわしているとはどうみても解せない。淳仁の言動に対する孝謙の反応であることは自明である。この「いとほしむ」については、「自分を気の毒に思う」という解釈なら理解可

能だが、より素直にとらえれば、要は淳仁の言動を受けて困惑している、という意味であろう。

なお、ここで語源に関する私見をまとめておこう。山口「一九九三」(初出は山口「一九六六」)は、本文①における傍線部の「伊等保^保」の表記と、同じ『続日本紀』宣命第十三詔の「勞^彌」、宣命第二十三詔の「勞^蔽」といった表記との関係に注目して、次のように論じている。

もともとイタハシとイトホシとは、母音交替によって生じた同源異形の語と考えられるが、動詞イタルとの関係から見て、イタハシが元の形で、イトホシが後出の形であろう。宣命・二七詔のイトホシミが大字仮名書きされているのは、注意すべきで、…〔中略〕…この場合、イタハシが標準形、イトホシが訛形というような差異があつて、そのために、イトホシミが仮名書きされているのではなからうか。宣命の「勞^彌」は、やはりイタハシミと訓むべきものであろう。即ち、イタハシは、奈良時代以前の標準形であつたために、「勞」などの漢字といち早く結合してしまったが、イトホシは、訛語・俗語として意識されたために、漢文訓読の場に入らず、遂に漢字の正訓としての位置を獲得するに至らなかつたのではなからうか。

「いたはる」「いた(痛)し」などと「いたはし」とが同根であることは定説化しているとおもわれるが、心の苦痛をあらわすという点で、山口論文が述べるとおり、「いとほし」もこれらの語の仲間

ととらえることが妥当であるようにおもわれる。

一方の、動詞「いとふ」の形容詞化という説については、「いとふ」の形容詞形であることが確実な形容詞「いとほし」と、「いとほし」との相違を説明しうるのかどうかのポイントの一つとなりそうである。「いとほし」の語義は、いやだ、わずらわしい、などと説かれる。そのような語義であれば、動詞「いとふ」から派生した形容詞としていかにもふさわしい感があるが、「いとほし」の場合も同一の語義とみるのは無理であろう。関「一九七二」は、「いとほし」からの母音交替形としての「いとほし」という理解を前提とし、「いとほし」の語義と一致する「いとほし」が意外と多いことを論じている。なるほど、先の①などは、そのような嫌悪感の意でも解しうるかも知れないが、後述するように以降の多数の用例をみてゆくと、いやだ、の意では解せない場合が多くなる。

こうした次第で、ここでは「いたはし」からの母音交替形とみる説を支持しておく。その場合、本来的な意味は、心に痛みをおぼえるようなつらさ、困惑、ということにならう。問題は、前節でも述べたように、いつの時点でこの語義が同情をあらわすようなものへ変化したのか、である。また、仮に比較的早く変化が起きたとしても原義もなお生き延びていたのならば、それらがどのように使い分けられ、また読む側がどのように峻別したのか、ということがさらなる問題となつてこよう。そのあたりについて、定かにしがたいのだが、むしろ発想を転換し、仮に原義だけがしばらく生き延び、他

者への同情をあらわすようになるのが数百年後のことだと解してみ
てはどうだろうか。その方が、言葉の用いられ方としては不自然で
はないようにおもわれるのであるが、このあと(2)以降の観点もあわ
せてゆくと、いよいよ早い時点での語義の変化ということはひとめ
にくくなるはずである。

(2) 「いとほし」のあらわす感情の対象となるもの

「いとほし」については、結局、この語があらわす感情の対象、
すなわち時枝「一九四一」のいう対象語のとらえ方次第で解釈が大
きく分かれてきたようだが、この点については従来の標準的なとら
え方をも根本的に見なおすべきではないだろうか。これまででは、
「いとほし」の対象を自分ないしは他人、つまりは人と解している
場合が圧倒的に多いようだ。たとえば、吉澤「一九五〇」では次の
ように説かれている。

平安時代では、「いとほし」といふ言葉を、自他困惑の表現に
用ひてゐた。即ち、「自」の場合は「困る」の義に、「他」の場
合は「気の毒」の義に用ひられてゐたのである。

こうしたとらえ方は、二節で引用した主要な辞書でも、また諸注釈
でも踏襲されている。

しかし、あらためて先の本文①、宣命第二十七詔を例に考えてみ
よう。孝謙上皇は、自身に対して淳仁天皇が批判的言動をとってい
ること、そしてそのことが孝謙には「朕が劣きに依りてし、かく
言ふらし」とおもわれたことから、「愧しめいとほしみなも念

す」ということになった。「愧しみ」と「いとほしみ」が並列関係
にあることから判断しても、孝謙が淳仁という他者を「愧しみいと
ほしむ」と解せないのは当然だろうし、自分自身を「いとほしむ」
と解するのも、やはり不自然であろう。つまり、この「いとほし
む」は人物を対象とはしていない。淳仁の批判的言動、すなわちこ
とを、「いとほしむ」のである。

右の場合は「いとほしむ」という動詞であるが、形容詞「いとほ
し」とその名詞形「いとほしさ」についても同様のことがいえるだ
ろうか。ここで、成立の早い『竹取物語』にみえる「いとほし」と
「いとほしさ」（以上二例のみ）をとりあげてみよう。

②かぐや姫の言ふやう、「親のたまふことをひたぶるに辞び申
さむことのいとほしさに」と取り難き物をかくあさましく（庫
持皇子ガ）持て来たることをねたく思ひ、翁は、聞のうち、し
つらひなどす。（二五頁）

③……「天人ガ姫ニ」ふと天の羽衣うち着せたまつれば、翁を
いとほし、かなし、と思しつることも失せぬ。この衣着つる人
は、もの思ひなくなりければ、車に乗りて、百人ばかり天人
具して、昇りぬ。（八二頁）

②・③のいずれの傍線部も、たいていは、翁を気の毒におもう気も
ち、などと解されてきた（なお『角川古語大辞典』は、③の傍線部
を「相手を愛し大事にする気持のさま」の例として挙げている）。
これに対し関「一九七二」は、右の二例ともに「いとほし」と同じ

意味をあらわすもの、すなわち「いやだ」の意に解している。「いとほし」と同一と考える点は措くとして、同情などの意に解さない方が文脈に合うとみている点が注意される。

②の場合、「親」、つまり翁の提案をひたすら拒否することの「いとほしさ」ゆえ、結婚の意志もないまま難題を出したのに庫持皇子が蓬萊の玉の枝を本当に入手するとは……、といった趣旨の発言のようである。翁への同情と解しても意は通ずるが、そう解するとき、「いとほしさ」の対象（翁）をあえて補足して解することになる。本文では「辞び申さむことのいとほしさ」とあるが、この助詞「の」は、『古語大辞典』（小学館）で「希望や好悪などの主観的な意味の対象を表す」と説かれている例にあたるだろう。ならば、「いとほしさ」の直接の対象は「辞び申さむこと」であって、かぐや姫は、翁の提案（五人の求婚者の中から結婚相手を選ぶよう勧めたこと）に対して拒否することを「いとほし」と感じた、と解くべきではないか。その場合、困惑・つらさをあらわすにとらえられよう。あえて、「いとほし」の原義から離れた解釈をしなくても済むのである。

本文③の場合は、「翁を」と明確に対象を示しているように見えるものの、情意性形容詞（感情形容詞）のとりうる対象語については慎重な検討が必要となりそうだ。たとえば、『源氏物語』『玉鬘』巻で、初瀬において玉鬘一行と偶然再会したときの右近の感慨が語られる箇所注目してみよう。

④……「玉鬘ガ」田舎び、こちこちしうおはせまししかば、いかに玉のきずならまし、いであはれ、いかでかく生ひ出でたまひけむ、とおとど「少式ノ妻」をうれしく思ふ。母君は、たたいと若やかにおほどこかにて、やはやはとぞたをやぎたまへりし、これに氣高く、もてなしなど、はづかしげによしめきたまへり。

（玉鬘、七四〇～七四一頁）

傍線部内「うれしく」の実質的な対象を「おとど」当人と解することとは困難であろう。その対象は、「おとど」の「愛育ぶり」（新大系）、あるいはその「教育が立派であったこと」（新全集）にとらえられる。つまり、形容詞「うれし」は、人をあらわす対象語を実質的にとりえないのではないか。国立国語研究所「一九七二」でも、現代語の「うれしい」及び「かなしい」が、もの及び人をあらわす対象語をとらないことが示されている（二二頁）。古語の「うれし」も同様で、人に関することを対象語にとるのである（情意性形容詞すべてが人をあらわす対象語をとらないということではない）。では、③の「いとほし」の場合はどうか。同情などをあらわす場合は、間違ひなく人そのものが対象となるわけだが、この語の原義、すなわち困惑・つらさをあらわす場合には、人そのものを対象とはしないだろう（現代語でも「ある人がつらい」「ある人をつらい」などとはいわない）。本文③の「翁をいとほし」については、④の「うれし」と同様に人を対象語にとらない形容詞でありながら助詞「を」を用いた例とみて、翁本人でなく、翁のこれまでの言動に対

する困惑、と解することができるのではないか。翁は、かぐや姫に結婚を勧めたり、その昇天を阻もうとしたりして、姫を困惑させることが幾度かあった。また、本文③では「いとほし」と「かなし」が並んでいる。関「一九七二」にも指摘されているように、ここで「いとほし」と「かなし」が「好悪」「愛憎」のような対の関係にあるとすれば、「いとほし」はネガティブな感情をあらわすとみるのが妥当であろう。

以上みてきたように、「いとほし」という形容詞が困惑・つらさなどをあらわす場合、人そのものでなく、人に関わる事態がその感情の対象となるようである。そういう語が、ある時期から人を対象として同情をあらわすようになることはもちろんみとめてよいだろうが、『竹取物語』以降『源氏物語』あたりまでの諸例をみてゆくと（あくまでも稿者の調査・検討による整理だが）次のようなことが確認される。

- ・人ではなく、ある事態を対象としていとしか解せない例が見いだされる。
- ・人を対象としているようにもみえるが、ある事態を対象としているとみることのできる例が見いだされる（数としてはこれが多い）。
- ・ある事態ではなく、人を対象としていとしか解せない例は見いだせない。

このようなとらえ方が正しいならば、『源氏物語』あたりまでの「い

とほし」は、原義が保たれたままであって、他者への同情をあらわすのはさらに時代が下ってからのことであると理解されねばならないだろう。

なお、右の三点めに関わる問題として、「人のため」とともに用いられる「いとほし」について言及しておきたい。中川「一九八〇a」ではそうした例（計十六例）について、「文字通り「人のため」なのであるから、他人に対する心情である」と説いている。しかし、『源氏物語』における「ため」は、すべてが利益を受ける目標の所在をあらわしているわけではない。たとえば、『古語大辞典』（小学館）で「行為の結果を受けるものの所在を示す。：にとつて」と説明される「ため」も、用いられているのである。

⑤大臣おとど（「源氏」も、「玉鬘たまむすめが鬘黒ト結バレタコトヲ」心ゆかず口惜くちをし、と思せど、言ふかひなきことにて、誰たれも誰たれもかくゆるしそめたまへることなれば、ひき返しゆるさぬ気色けしきを見せむも、人のためいとほしうあいなし、と思して、儀式いと二なくもてかしづきたまふ。

（真木柱、九三五頁）

右の「真木柱」巻頭近くの一節で、光源氏の心内をあらわす傍線部について、中川論文では「大将のためにも気の毒で不都合」と解していて、大半の諸注釈も同様だが、そもそもこの文脈で光源氏が鬘黒に同情的な思いを抱くことが不自然ではないか。ここの「ため」の解釈は、鑑賞にならない、大将にとっては困ることであり筋違いでもある、とすべきであろう。

(3) 複数の語義があることの非合理性

従来の標準的な「いとほし」の理解に即してゆくと、本稿の一節で整理した語義A・Cのうち、特にA・Bのいずれに相当するのかをそのつど判断しなくてはならない。濱橋「二〇〇二」及び濱橋「二〇〇四」の批判があるように、諸注釈の多くは、語義A（困惑・つらさなど）に解されるべき箇所を、語義B（同情など）で解してきた。これすなわち、語義Aが最終的には妥当と判断される「いとほし」でさえ、語義Bで解されてきた（つまり誤解された）場合が非常に多いことを意味している。ことほどさように語義AかBかの選択は困難をきわめている。その困難さについて、夙に宮地「一九七九」が、「情意をあらわす語は、自己へ向かうのか、他者へ向かうのか、また、嫌悪にかたむくのか、同情・憐憫にかたむくのか、本来その峻別は不可能であることが多く、また「文章上にあらわれない主語や目的語の何を補うかという解釈によって、あるいは前後の文のどこに切れ目を置くかという立場によって」とらえられる意味が異なってしまうことを指摘していた。ここにいう「目的語」の問題については先の(2)で検討した。宮地論文は「情意をあらわす語」全般についてこうした困難さがつきまとうことを示唆している。確かにそういう傾向がみとめられようが、それにしても「いとほし」の峻別の困難さは特筆すべきであろう。

本稿とは反対に「いとほし」の語義が（ほぼ）Bに限られるとする立場からの発言ながら、池田「二〇〇〇」の示した疑問、「そも

そも、どちらの語義を適用するかによって内容までが変わってしまう語義など両立しえないのではないか」というのは、そのとおりであろう。こうした判別は、今から一千年ほど前の読者たちにはたやすかったということか。一千年前のいにしえの人たちでも、語義A・Bのいずれかを難なく選択することはできない——というよりもそのような選択を迫られること自体がなかったとみてよいのではないか。つまり、「いとほし」の語義AとB（さらにはC）が早くから混在していたという認識をあらためるべきであろう。とはいえ、同情などの意（語義B）に限定する説については、先の(1)・(2)の検討を経た段階ではしたがえない。そもそも、平安時代の諸例すべてが語義Bに限られるのであれば、従来の語源説が完全には外していて語義A自体も的はずれであること、もしくは語義Aが平安時代の初期あたりで完全に廃れたこと、以上のいずれかを証明しなくてはならないはずだが、もちろん、いずれも論証は不可能であろう。

(4) 用例ごとに語義の微妙な差異をみることの非合理性

「いとほし」の語義の把握が困難であることに関わるが、これまで、その語義AからBへ、またBからCへという変化が論じられるよりは、たとえば個々の作品、さらに個々の用例における語義の微妙な差異が論じられる場合が多かった。

たとえば小原「一九七九」では、「自責」と「同情」の二義に概括した上で、『源氏物語』以前は「自責や困惑」をあらわす例が多く、「対象となる人物のみに、自己の感情は集中」し、同情する相

手以外への関心がもたれていないのが、『源氏物語』の時代では、「自責」と「同情」が「同時並行的」になるとともに、「いとほし」の対象となる相手が「自分の最も関心ある人物である」と言い切れない」ようになってくるといった変化が論じられている。さらに小原論文では、『源氏物語』の「いとほし」の「同情的表現」においては相手に対する三種類の「心理的なはたらきかけ」があるという。それらを検討してみよう。

⑥……御息所は、心ばせのいとほしかしく、よしありておはするものを、いかに思しうむじにけん、いとほしくて、〔源氏ハ御息所邸ヲ〕参うでたまへりけれど、……

（葵、二八九～二九〇頁）

⑦いづこを面にてかはまたも見えたてまつらん、いとほし、と〔藤壺方〕思し知るばかり、と思して、御文も聞こえたまはず。

（賢木、三五三頁）

⑧山里〔「大堰」のつれづれ、ましていかに、と思しやるはいとほしけれど、明け暮れ思すさまにかしづきつつ見たまふは、ものあひたる心地したまふらむ。

（薄雲、六〇八～六〇九頁）

小原論文では、右の⑥～⑧の傍線部を順に、「(一)、相手に近寄りたい気持」「(二)、相手を自分のもとへ引き寄せたい気持」「(三)、立ち去りがたい、捨てがたい気持」と分類している。なお、諸注釈もこれら⑥～⑧を同情の意に解するのが通常であろう。

まず⑥は、車争いのことを知らされた光源氏が六条御息所の屈辱

感を想像している箇所であるが、「いとほしくて」御息所邸に参上されたという箇所を、諸注のように光源氏から御息所に対する同情ないしは憐憫として解することには無理があると考ええる。この「葵」巻前半では、御息所に関して光源氏が「いとほし」と感じる箇所が幾度も出てくるが、光源氏が御息所に対して始終同情的だと解することはできないのではないか（むしろ、「いとほし」を従来通りに解することによってそのようなニュアンスがようやく看取されてきたというべきであろう）。なぜなら、光源氏は御息所と距離をとりたがっているし、ついおざなりな対応になりがちだということも語られるからである。ならば、ここに引用した一節も、御息所の屈辱感を想像しつつ、そのまま放っておくわけにもいかないという困惑から御息所邸に参上された、と解する方がよほど無理がないのではないか。

⑦の「賢木」巻の一節は、光源氏が三条宮邸の藤壺の宮に強引に迫ったものの拒まれてしまったという一件のすぐ後にある一節である。たとえば新全集では、

源氏の君は、何の面目あつて再びお目にかかることができよう、このうへは宮のほうでこの自分を不憫なとお分りいただくのをまつだけのこと、とお思いになつて、……

と現代語に訳している。小原論文も、藤壺の宮が光源氏の「宮を慕う気持を理解され、不憫に思つて下さつて、自分のそば近くへ源氏を引き寄せて下さるのを待とうとする」と解している。しかし、藤

壺の宮に「御文」も送らないという光源氏の対応について、これを「不憫」だとわかってもらう方策と解するのは、ねじれた把握ではないか。むしろ「いとほし」がつらさをあらわすと解したとき、すっきり了解される。つまり、藤壺の宮が、（光源氏から何ら音沙汰もない状態では）つらい、とおわかりになるまでの間だけは「御文」も送らないことにした、という解釈である。

⑧は、大堰に住まう明石の君から姫君を引き離れた直後の一節で、光源氏が明石の君の「つれづれ」をおもいやっているのは確かだが、これも明石の君への同情と解する必要はなく、大堰方の所在なさを想像することが光源氏にとってつらい、という意であろう。

以上、小原論文の挙げている『源氏物語』の用例に即して検討してみたが、このように困惑・つらさをあらわす形容詞と解しておけば、個々の用例のニュアンスの差異をわざわざ複雑にとらえてゆく必要もないのである。

また、中川「一九八〇b」は、『竹取物語』『大和物語』『かげろふの日記』『和泉式部日記』『落窪物語』『枕草子』『紫式部日記』『栄花物語』『大鏡』（以上、掲出順）などにおける「いとほし」の微妙な差異をとらえようとし、「王朝の貴族社会での同情という一つの意味の中においても、「いとほし」は作品の性質により、その主題により、微妙に異なった様相を呈している」と論じている。本稿では、先の『竹取物語』と『源氏物語』以外の諸作品の用例についてとりあげる余裕がまったくないので、別途検討することを諒と

されたいが、おそらくは「同情という一つの意味の中」へ収めようとしたがゆえの微妙な違いに過ぎないのではないか。たとえば『かげろふの日記』の「いとほし」については、「道綱母から兼家への心情を他の人間を通じて間接的に述べるという屈折した用いられ方をしている」などと説かれているが、そこまでの「屈折」を読みとるまでもないようにおもう。

(5) 類義語とされてきた「心苦し」との関係

もし「いとほし」が同情などをあらわすとすれば、他者への同情をあらわしうる別の形容詞「心苦し」との関係が問題となる。既に小原「一九七九」、中川「一九八〇a」が丹念にこのことを検討している。「心苦し」には自責の念があるという理解が、両論文に共通しているが、小原論文は、先にも確認したとおり、「いとほし」の「自責」から「同情」へという変遷を重視し、自責の感情をあらわす語が「いとほし」から「心苦し」へと受けつがれたという理解を示す。中川論文では、より多くの「心苦し」の用例もふまえ、主観的な「心苦し」に対して、「いとほし」が「客体を主点に据えた」客観的な感情をあらわすこと、また「真情」をあらわす「心苦し」が「美に通じる」のに対して、特に『源氏物語』の「いとほし」は、「当時の貴族社会」において「形の上で他に対して思いやりを見せるという「情」の文化、教養人の規範」、あるいは「人為的に形作られた文化規範」に相当するということを論じている。大変周到な論述だが、「いとほし」は「客体を主点に据え」ていると

いうことが果たしていえるだろうか。たとえば、陣野「二〇一〇」であつかった「総角」巻の「いとほし」の諸例をみると、他者との関係の中で当の他者へと向かつてゆけない心情こそがあらわされているとおもわれる。詳細は同論文を参看されたいが、たとえば大君と中の君の姉妹関係にしろ、薫と姉妹との関係にしろ、「いとほし」によって示される個人的、利己的な困惑ぶりが、心と心の「へだて」に照応するようである。「いとほし」は主観的な「心苦し」に対して客観的、というように二者の関係をとらえるのではなく、「いとほし」は同情をあらわしえない、ととらえるだけで充分ではないか。試みに、これら二つの形容詞が並んで用いられる箇所をみておこう。

⑨……「大宮」〔夕霧ノ〕御ことにより、内の大臣おとどの怨じてものしたまひにしかば、いとなむいとほしき。ゆかしげなきことをしも思ひそめたまひて、人にも思はせたまひつべきが心こころ苦しきこと。かうも聞こえじ、と思へど、さる心も知れたまはでやと思へばなむ」と聞こえたまへば、心にかかれることの筋なれば、ふと思ひ寄りぬ。
(少女、六八六頁)

⑩かく、「源氏ガ柏木トノ一件ノ」けしきも知れたまはぬも、いとほしく心こころ苦しき思されて、宮〔女三〕は、人知れず涙ぐましく思さる。
(若菜下、一一八二頁)

本文⑨では、夕霧の祖母大宮が夕霧に向けて話している。夕霧と雲居の雁との関係をめぐって内大臣が大宮に怨み言をぶつてきた

ことを受け、大宮は傍線部のように「いとほしき」という感情をいだいている。中川「一九八〇a」は、この「いとほしき」を「后がねの雲居雁に傷がついたと怨じる内大臣に対」する感情とし、一方の波線部「心苦しき」を夕霧に対する感情と解している。だが、前者については、この場面に至るまでの大宮と内大臣とのやりとりをふまえてみても、内大臣への同情とは解しにくい。諸注釈では、玉上評釈・新大系が、夕霧への同情とみている。なお、風間注釈は山崎「一九七〇」に拠り「夕霧に対して済まないと思う表現」と独自の解釈を示す。しかし、ここは全集・集成・新全集・鑑賞と同様、大宮の困惑と解せば何ら問題なからう。また、「ゆかしげなきことを」以下、波線部あたりまでは、傍線部「いとほしき」を内大臣の怨み言への困惑と解したとき、その直後で内大臣の今後の言動を懸念しているものと素直に解せるだらう。さらに、ここにおける「人」については、鑑賞（一〇三頁、語句解釈⑫、秋澤互担当）で「私にもあなたにも」という解釈の可能性が示されているが、そのように複数を指示すると解してよからう。ただし、具体的には夕霧と雲居の雁が主ではないか。「いとほし」は大宮自身の困惑をあらわし、「心苦し」は内大臣によって「もの思はせ」られるであろう夕霧と雲居の雁のことをおもって大宮が心痛めていることをあらわしていると考ええる。これら二語の差異は明瞭であろう。

次の⑩は、柏木と通じてしまった直後、女三の宮が病気がちということで、紫の上の看病にあたっていた光源氏が二条の院から渡っ

てきた際の、女三の宮の心情を語っている箇所である。中川「一九八〇a」は、傍線部「いとほし」について、「密通を知らず労わり、陳弁にこれ務める源氏への心情」とし、一方の波線部「心苦し」は、「不義を犯した我と我身への自責の念」だとする。しかし、むしろ「いとほし」が自身の困惑・つらさをあらわし、一方の「心苦し」は、自責の念を伴いながら他者（光源氏）に対して顔向けできないと感じるレヴェルでの心の痛み、とみる方がふさわしいのではないか。女三の宮が柏木と通じたあとの混乱状態の中で、早速光源氏をおもいやり、気の毒に感じる、ということは考えにくいようにおもえるのである。

*

以上、五つの観点から、「いとほし」の原義が『源氏物語』が書かれたころまで保たれるとともに、同情などをあらわすことはなかった、つまり一節で整理した際の語義Bへの変化が生じるのはもう少しあつたであろうということを論じてきた。次節では、一節に示した語義C、すなわち他者への保護的な感情をあらわす用例を平安中期までの作品内の用例としてとめてみる辞書、注釈、論考が少なくないので、それもありえないということを確認したい。

四 保護的な感情をあらわすとされてきた

「いとほし」の問題

二節で引用した辞書のうち、たとえば『日本国語大辞典 第二版』では「③」の語義として「弱小なものへの保護的な愛情を表わす。かわいらしい。いじらしい。いとしい。」と説明されていた。これに該当する用例として、『角川古語大辞典』は先にも確認したように、『竹取物語』（前節の引用本文③）を挙げている。それは極端な例であるとしても、たとえば『源氏物語』の諸注釈、また関係する論考では、『源氏物語』のなかにも少数ながらこの語義でとるべき例があることを示しているものがある。ここでは、特に木之下「一九六八」、小原「一九七九」でもとりあげられている「少女」巻の一節、夕霧と雲居の雁に対する祖母大宮の感情をあらわす「いとほし」を代表的な例として検討してみよう。

① 姫君（「雲居雁」）はいと幼げなる御さまにて、「内大臣ガ」よろづに申したまへども、かひあるべきにもあらねば、うち泣きたまひて、いかにしてかいたづらになりたまふまじきわざはすべからむ、と忍びてさるべきどちのたまひて、大宮をのみ恨みきこえたまふ。宮は、いといとほし、と思すなかに、男君（「夕霧」）の御かなしさはすぐれたまふにやあらむ、かかる心のありけるも、うつくしうおぼさるるに、「内大臣ガ」情けな

く、こよなきことのやうに思しのたまへるを、…〔中略〕…とわが心ざしのまさればにや、大臣おとしをうらめしう思ひきこえたまふ。

（少女、六八五～六八六頁）

傍線部「いとほし」の解釈について諸注釈をみてゆくと、「愛して」（新釋）、「いとしい」（全集・新大系）、「可哀さうに（かわいそうだ）」（全書・集成）、「可愛い（かわいい）」（大系・玉上評釈）、「不憫に」（新全集）、「お気の毒に」（鑑賞）、「（内大臣に）申し訳ない」（風間注釈）となっている。最後の風間注釈以外は、孫たち具体的には夕霧と雲居の雁を対象とした感情と解している。そして半数以上が、一節で記した語義Cをあてている。そのような解釈は、おそらく「宮は、いといとほし、と思すなかにも、男君の御かなしさはすぐれたまふにやあらむ」という部分のみを切り取ってみている結果ではないか。

「いとほし」が「愛憐」の意味をあらわすようになる時期を中世以降とみている宮地「一九七九」では、この本文⑪において「イトホシの目的語（句）として、大宮の孫達を補うか、夕霧の恋愛問題をめぐっての事態を補うか、すなわち、イトホシが後文に係るとみとめるか、前文を承けるとみとめるかによって」解釈が異なることになると指摘していた。まさに、そのとおりであろう。傍線部の「いとほし」を、直後の夕霧に対する「御かなしさ」と対応させてしまうと、たしかに「いとしい」「かわいい」などの解釈もでてくる。諸注釈のほとんどが、「宮は、いといとほし、と……」以下か

ら改行している。かつ新たな章段の冒頭として処理しているものも多いが、この大宮の「いといとほし」という感情は、直前で内大臣が大宮に対して恨んでいることを承けるものと解すれば、無理なく困惑の意と解せる。ここでは紙幅の都合で逐一確認しないが、実はこの夕霧と雲居の雁の一件に関わる前後をふくむ叙述のなかで、「いとほし」は計六例が集中的に用いられており（そのうちの六番めは先の本文⑨）、内大臣、大宮、大宮付きの女房、雲居の雁の乳母らが、夕霧と雲居の雁が恋仲になっているという事態を受け、それぞれ困惑しているという状況が語られていた。

なお、⑪の傍線部を受ける「と思すなかにも」については、「孫たちの中でも」ということではなからう。この「なか」は、心中の意と解せばわかりやすくなる。

以上、典型的な一例に絞って検討したが、要は、「いとほし」が弱者への保護的な感情をあらわすことは、『源氏物語』においてはありえないとおもうのである。

五 語義の一貫する「いとほし」

—— むずびにかえて ——

形容詞「いとほし」について、本稿では、従来の標準的な把握とは大きく異なり、『源氏物語』が書かれたころまで、すべての用例が自身の困惑・つらさなどをあらわすものと解せることを論じてき

た。先にもことわっているように、本稿では多数の用例に即して帰納的に検討することができなかったので、別途そのような機会をもちたいとおもっている。

『源氏物語』以前のさまざまな作品内の用例に関しては、既に論考にまとめる準備を進めつつあるが、もちろん『源氏物語』成立以降、同情などの意に変化してゆくのがいつごろからなのか、という問題も重要なので、あわせて調査してゆく予定である。おそらくは平安末期ごろになるのではないかとおもわれる。

本稿で主張したように『源氏物語』にみえる「いとほし」、及びそれから派生した語のすべてについて、困惑・つらさなどをあらわすということがみとめられた場合、陣野「二〇一〇」でも「総角」巻を例にして論じたように、『源氏物語』の作中人物どうしが、頻りにお互いをおもいやっているというように解されてきた箇所などは全面的に見なおされなくてはならないということになる。『源氏物語』の作中の人物たちは、その時々で他者を慮ることももちろんあるわけだが、その一方では、かなり利己的に、自身の立場に即して物事を感じ取っているのではないか、という予感がある。平安貴族なるものについての先入観をはずし、あくまでも言葉の意味内容に即してとらえてゆきたい。

※『源氏物語』の本文は、いずれも古代学協会・古代学研究所（編）、角田文衛・室伏信助（監修）『大島本源氏物語』（角川書

店）の影印に拠り、私に校訂した。引用本文の末尾の（）内には、池田亀鑑（編著）『源氏物語大成』校異篇（中央公論社）の頁数を付した。

※『続日本紀』の原文及び訓読文は、青木和夫・稲岡耕二ほか（校注）『新日本古典文学大系 続日本紀 三』（岩波書店）に拠る。『竹取物語』の本文は、野口元大（校注）『新潮日本古典集成 竹取物語』（新潮社）に拠るが、一部表記を改めている。引用本文の末尾の（）内には同書の頁数を付した。『統紀歴朝詔詞解』の本文は、大野晋（編）『本居宣長全集 第七卷』（筑摩書房）に拠る。

※『源氏物語』諸注釈書の略号は、新釋Ⅱ『對校源氏物語新釋』（平凡社）、全書Ⅱ『日本古典全書 源氏物語』（朝日新聞社）、大系Ⅱ『日本古典文学大系 源氏物語』（岩波書店）、玉上評釈Ⅱ『源氏物語評釈』（角川書店）、全集Ⅱ『日本古典文学全集 源氏物語』（小学館）、集成Ⅱ『新潮日本古典集成 源氏物語』（新潮社）、新大系Ⅱ『新日本古典文学大系 源氏物語』（岩波書店）、新全集Ⅱ『新編日本古典文学全集 源氏物語』（小学館）、鑑賞Ⅱ『源氏物語の鑑賞と基礎知識』（至文堂）、風間注釈Ⅱ『源氏物語注釈』（風間書房）。

注

（1） 用例数は、『源氏物語大成』ならびに『CD-ROM 角川古典大観 源氏物

語」を併用して確認した。なお、「いとほし」からの派生語として「いとほしがる」「いとほしげ」「いとほしさ」「いとほしみ」、それに「なまいとほし」も含めている。

- (2) 会話を受ける助詞「と」は諸本になく、「いとほしさにとりかたき」となっている。引用本文②では、「と」とあった本文の「、」の脱落を想定する説(『日本古典文学全集 竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』の注記)を受け、助詞「と」を補った本文にしてあるが、「……かくあさましく持て来たること」あたりまでががぐや姫の会話文で、その末尾が地の文に融合した形とみることもできるようにおもわれる。

- (3) 『平安文学の古注釈と受容 第三集』(武蔵野書院、二〇一一年五月刊行予定) 及び『源氏物語の展望 第十輯』(三弥井書店、二〇一一年九月刊行予定) に掲載される拙論にて、『源氏物語』以前の「いとほし」の用例もととりあげる予定である。

引用文献

- 池田節子「二〇〇〇」「いとほし」 秋山虔(編)『王朝語辞典』東京大学出版会
- 大野 晋「一九六二」『日本語の年輪』有紀書房
- 小原君恵「一九七九」「いとほし」の沿革『武庫川国文』一六 武庫川女子大学国文学会
- 北山谿太「一九五六a」「語釋研究三つ——さるものにて・いとほし・案内——」『解釈』二二 解釈学会(↓北山「一九五六b」に収録)
- 北山谿太「一九五六b」「源氏物語のことばと語法」武蔵野書院
- 木之下正雄「一九六八」「平安女流文学のことば」至文堂(Ⅲ—9)
- 国立国語研究所「一九七二」「形容詞の意味・用法の記述的研究」秀英出版
- 後藤貞夫「一九六〇」「源氏物語における「いとほし」の意義用法について」『国文学攷』二三 広島大学国語国文学会
- 陣野英則「二〇一〇」「源氏物語」『総角』巻の「いとほし」——困惑しあう

『源氏物語』の「いとほし」

人々——『国文学研究』一六二 早稲田大学国文学会

関 宣市「一九七二」「いとほし」の語義——主として「いとほし」を意味するものについて——『國文鶴見』六 鶴見女子大学日本文学会

時枝誠記「一九四二」『国語学原論』岩波書店

中川正美「一九八〇a」「源氏物語における「いとほし」と「心苦し」 国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究』一 和泉書院

中川正美「一九八〇b」「いとほし」の種々相『平安文学研究』六三 平安文学研究会

濱橋顕一「二〇〇二」「さし当りていとほしかりし事の騒ぎ」——「いとほし」の語義のこと 鈴木一雄(監修) 河地修(編)『国文学 解釈と鑑賞別冊 源氏物語の鑑賞と基礎知識21 常夏・篝火・野分』至文堂

濱橋顕一「二〇〇四」「いとほしう人々も思ひ疑ひける筋」——「いとほし」の語義のこと 鈴木一雄(監修) 仁平道明(編)『国文学 解釈と鑑賞別冊 源氏物語の鑑賞と基礎知識37 真木柱』至文堂

東辻保和「一九七二」「枕草子」の語彙から見た感情表現『月刊文法』三 四 明治書院

宮地敦子「一九七二」「情意語の意味変化」『日本語と日本語教育語彙編』文 化庁(↓改題して宮地「一九七九」に収録)

宮地敦子「一九七九」「心身語彙の史的研究」明治書院

山口佳紀「一九六六」「今昔物語集表記法管見」『國語と國文學』四三—二二 東京大学国語国文学会(↓山口「一九九三」に収録)

山口佳紀「一九九三」「古代日本文体史論考」有精堂出版

山崎良幸「一九七〇」「いとほし」と「心苦し」の意義について『高知女子大国文』六 高知女子大学文学部国語国文学会

吉澤義則「一九五〇」『源語釋泉』誠和書院